

おとこのこ  
〈男の娘〉のセクシュアリティ

木明 拓椰（経済学部4年）  
指導教員：新島 進

おとこのこ  
近年、〈男の娘〉と呼ばれるキャラクターがサブカルチャーにおいて人気を博している。〈男の娘〉は外見上や声は完全に少女でありながら、生物学上は男であり、男性器を持ったキャラクターを指す。この〈男の娘〉にまつわるムーヴメントの最も特筆すべき点は、そのファンの多くが男性異性愛者であることだ。〈男の娘〉が登場する作品は男性向けのコミック誌やライトノベル、ゲームなどが大半を占めているが、その中では彼／女らは常に女性として描かれており、明らかにヘテロセクシュアルな性愛を指向している。では、なぜ彼／女らは男性でなければいけないのだろうか？

そこで、まず〈男の娘〉に至る女装する少年の歴史的な文脈を辿り、また、現代における〈男の娘〉を描いた作品を概観した。その後、〈男の娘〉をメインヒロインとした先駆的作品であるPCゲーム「ツイ☆てる」（2007年）を分析し、完全に女性として描かれているにもかかわらず男性器がついていることの意義を問うた。最後に、〈戦闘美少女〉という身体的性別は少女でありながらその身体を危険にさらして戦う、いわば〈男の娘〉の鏡像とも呼べるモチーフとの比較を行い、この性差の逆転現象を検討した。

歴史的な文脈からは、1970年代以降女性に大人気となった少年愛を描くボーイズ・ラブの作品群との比較を行った。彼女たちは女性性嫌悪や異質（hetero）なものへの恐怖から同質（homo）なものへの愛、すなわち同性愛を求めたが、〈男の娘〉もまた男性という自己（〈男の娘〉愛好者の男性）と同質なもの求めた、いわばボーイズ・ラブの裏返しであることを論じた。

文化的な文脈では、「おたく」的なオタク文化の影響を考察した。反社会的性格を無意識下に持つ「おたく」たちは、「理想的」男女恋愛至上主義に対して反旗を翻すために、女性でありながら女性でなければよいという根本からの価値転倒による解決を図った。その結果、〈男の娘〉——男性であるという一点を除いて男性にとって理想の女性像である——を生んだのではないだろうか。

〈戦闘美少女〉との比較では、〈男の娘〉との間に極めて多くの類似点が見られた。彼／女らが繰り返し描かれる存在であり続けるのは、現実世界における理想像の反映ではなく、その非存在性そのものが魅力の源泉であるからと意味づけた。「戦闘」と「美少女」という矛盾は「男」の「娘」というアレンジメントによって再びよみがえったのだ。ツイ☆てることの意義は、この矛盾のためであり、リアルな虚構化の手続きのためであり、そして彼／女が存在するためであると結論付けた。